ひぐらしのなく頃に白　人隠し編

kai

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらしのなく頃に白　人隠し編

【Ｎコード】

Ｎ３８３３Ｚ

【作者名】

ｋａｉ

【あらすじ】

ある日、この雛見沢に２人の転校生が引っ越して来た。１人は明るく１人は暗い対称的な２人だった。しかし、ちょうどその頃、雛見沢に大きな出来事が・・・

新たな（前書き）

みなさん、おはようございます。こんにちは。こんばんは。どうもｋａｉです。新しい物語を作ってみました。暖かい目で見てやってください。

新たな

主人公

神寺白（かみじはく）

転校生の1人、明るい性格で辛い物が大好きな女の子。ちなみに彼女は、中学3年生。

鬼神黒（きじんくろ）

転校生の1人、暗い性格で苦いものが大好きな男の子。彼も中学3年生だ。

光があれば闇がある・・・陰があれば陽もある・・・人間も同じ・・・幸せになる者もいれば不幸になる者もいる・・・それが全ての法則。

白side

私は、神寺白（かみじはく）。千葉県からやって来た。両親は私が幼い時に交通事故で他界した。私は、おじいちゃんとおばあちゃんが雛見沢に住んでいるのでそこで引き取ってもらうことになった。そして今、着いたところだった。雛見沢に来て最初に言った言葉は、

「雛見沢は、空気がおいしいな～」

私は、そう言っておばあちゃんとおじいちゃんの家に向かった。行くまでにかなりの時間がかかった。

そして・・・ようやく・・・・着いた。長かった！！実に長かった！！もう・・・動けない・・・その時、おばあちゃんが出てきた。

「あら～白ちゃんいらっしゃい。疲れたでしょ？お風呂沸かしてあるから入ってきなさい」

「ありがとう、おばあちゃん」

私はお風呂場に行き汗でベトベトな服を脱ぎシャワーを浴びた。そして、パジャマに着替え居間に行った。そこには、おじいちゃんがいた。

「おじいちゃん」

「おお、白か！！」

おじいちゃんは、驚いたように言った

「久しぶりだね」

「そうだな～」

それから、色々と話が弾んだ。千葉のことや友達のことなど。そして、思い出した。確かここ最近私の友達がここに引っ越したと聞いた。

名前は・・・えーと。あっそうだ！！確か本性クロト（ほんしょうくろと）君が来てたんだ！！

本性クロト（ほんしょうくろと）君とは、昔、私が東京にいた頃、

ご近所にいた内気な男の子だった。よく遊んだっけ・・・元気にしてるかな～　その時、おばあちゃんがやって来た。

「夕飯ができましたよ～」

「やったーお腹空いてたんだ！！」

「おお、飯か」

夕飯を食べた後、私は明日の学校の準備をした。そして、すぐに寝た。朝はさわやかに起きた。そこにおばあちゃんが現れてこう言った。

「白ちゃんおはよ～朝ごはん準備してあるからね」

「うん、ありがとう」

私は、朝ご飯を食べ終え顔を洗い歯磨きをして制服に着替えおばあちゃんにこう言った。

「行ってきまーす！！」

新たな（後書き）

ちなみにこの物語は、「ひぐらしのなく頃に生」と「ひぐらしのなく頃に死」の続編です。

初めまして

私は今、学校の中の職員室前にいる。とても緊張していた。しかし、深呼吸をして心を落ち着けて職員室のドアを開けて私はこう言った

「失礼します」

そしたら、女の先生らしき人が現れてこう言った

「初めまして、担任の知恵です」

「初めまして」

とても優しそうな先生だな～と思った。そして、知恵先生が言った

「神寺さんはそこのイスで待っててください。まだ、あなたの他にも転校生が来るんです」

初耳だった。私の他にも転校生が来るなんて。しばらく待つと、ガラガラとドアを開ける音が聞こえた。振り向いて見ると、そこには男子が立っていた。さしずめこの子が転校生だと分かった。すると、知恵先生が

「では、教室に行きましょう。神寺さんと鬼神くん付いて来てください」

私は、「はい」と言ったが、鬼神君は何も返事がなかった

教室の前に立って、また緊張感に襲われた。だけど、鬼神君は大丈夫そうに見えた

そして、先生が教室に入った瞬間、先生の顔に雑巾が投げつけられた。パアァンものすごくいい音が鳴った。先生の前には、私と同じ年くらいの男子がいた。その男子は、苦笑いしながら先生を見てた。

「前原君・・・これは一体どういうことですか？」

先生は、体を震わせて言った

「前原君！！後で職員室に来てください！！」

大丈夫なのかな～このクラス・・・私は、心配になった。先生は、若干怒りながらもこう言った。

「今日は、２人転校生が来ています。では、神寺さんと鬼神君入ってきてください」

教室の中に入ったら、みんな学年がばらばらで驚いた。そんなことを思ってる時に、知恵先生が言った。

「では神寺さん自己紹介してください」

「はい！！私の名前は神寺白です。好きな物は辛いものです。みんなよろしくね！！」

その瞬間、大きな拍手が出てきた。

「次は、鬼神君お願いします」

「・・・鬼神黒・・・よろしく」

クラスがざわざわしだした

「はい、静かに！！では、神寺さんと鬼神君はそこに座ってください」

「はい」

では授業の方を始めたいと思います

遊び

授業が終わって教材を片付けていた所、緑色の髪をした人が私に話かけてきた。

「ねえ、おじさん達のゲーム部に入らない？」

ナンパするような言い方だった。しかも、自分のことをおじさんて

「ゲーム部？」

「ただゲームをするだけの部」

なぜ女なのにおじさんていうの？そう思いながらも私は、

「うん、入る！！」

そしたら、緑色の髪をした子は

「よっしゃー部員ＧＥＴ！！あっそうだ、名前言い忘れてたおじさんの名前は園崎魅音（そのざきみおん）て言うの。よろしくね」

と言った。私も、よろしく！！っと言った。

「じゃあ、ここで待っていて。」

魅音ちゃんは、そう言うと今度は鬼神君の所に行き部活の勧誘をしていた。とても喜んでいた。と言う事は鬼神君は部に入ったみたい。

魅音ちゃんが

「全員集合！！」

て言ったので私は魅音ちゃんに呼ばれて行った。そして、魅音ちゃんは部活メンバーらしき人達に

「我が部に新メンバーが加わった！！神寺白ちゃんと鬼神黒君だ！！」

みんなは、拍手して私達を歓迎した

「ではみんな各自自己紹介して」

「じゃあ、俺から・・・俺の名前は前原圭一（まえばらけいいち）よろしくな」

「うん、よろしく！！」

「次は、レナの番だね・・・竜宮レナ（りゅうぐうれな）だよ。よろしくね」

「うん、よろしく」

「次は、ぼくの番です～・・・ぼくの名前は、古手梨華（ふるでりか）なのです～よろしくなのです～にぱぁ～☆」

「に・・・にぱぁ～☆？」

「次は、わたくしですわね。わたくしの名前は北条沙都子（ほうじょうさとこ）ですわ。

以後お見知りおきを」

「よろしくね！！」

「では部活恒例のあれをやりますか」

「え、あれって何？」

私は聞いた。そしたら、圭一君が説明した

「あれっと言うのはいわゆるジジ抜きだ。俺が入った時もやったぞ！ちなみに負けたらひどいめにあうから覚悟しといた方がいいぞ」

「ひどいめってどう言うこと？」

「つまり、1位になった人はビリになんでも命令できるんだ」

「ちなみに・・・俺は・・・連続で最下位だからいつも・・・耐え難い屈辱を・・・受けている」

圭一君は、泣きながら言った。

「そうですか・・・」

そして、ジジ抜きが始まった結果、勝者は魅音ちゃん敗者は圭一君だった。魅音ちゃんは、圭一君に女子のスクール水着を着て帰れと言う命令だった。私は、ようやくこのゲームの恐ろしさを知った。そういえば、聞くことがあった。それは・・・本性クロト君のことだった。思い切って聞いてみた

「ねえ、本性クロト君確かここに引っ越したらしいんだけど今日、休み？」

みんなはびっくりしたような顔だった。

「白ちゃんは、クロちゃんの知り合いなの！？」

「う・・・うん」

罪悪感

みんなは驚いた顔をしたと思ったら次は暗い顔になった。その表情は、私を不安へと変えた。何でみんな黙ってるの？そう思った。そうすると魅音ちゃんがなぜか泣きながら言った。

「死んだんだよ・・・私のせいで」

「え・・・どういうこと？」

「私がちゃんと周りを見ていなかったから・・・クロちゃんが・・・クロちゃんが！！」

魅音ちゃんは取り乱していた。

「魅音落ち着け！！」

圭一君がそう言って魅音ちゃんを落ち着かせていた。

「白、来るのです」

梨華ちゃんが私を呼んだ。訳が分からないまま梨華ちゃんに廊下へと連れて来られた。

「白・・・このことはなるべく魅ぃの前で言わないで欲しいのです」

「何で？」

「魅ぃは自分のせいでクロトが死んだと思っているのです。今も自分のこと責めているはずなのです。だから言わないで欲しいのです」

そ・・・そんな・・・クロト君が死んじゃったなんて・・・私は、涙があふれてきた。しかし、涙は流さなかった。だって私が泣いたら魅音ちゃんがもっと自分を責めることになるから私は流さない！！そして、冷静になり梨華ちゃんから全てを聞いた。クロト君がここに来て変わったことやクロト君の最後を・・・そして教室に戻った。魅音ちゃんは、ずいぶんと落ち着きを取り戻していた。私は魅音ちゃんの所に行って謝った。

「ごめんね、嫌なこと思い出させちゃって・・・」

「うん、いいよ。こっちもごめんね取り乱しちゃって」

こうして私の一日は終わった。

？side

「はあ～めんどくせぇ～やるのはいいけど準備するのがめんどくせぇ～ようし！！今日の仕事はこれで終わりだ～明日が楽しみだ！！人が恐怖に引きつる顔を見るのは格別におもしろい・・・そういえ

ばここの土地に神がおったなぁ～神の一人としてあいさつをしなくちゃな・・・ていうか俺が騒動を起こせば向こうから来てくれるか・・・」

俺はそう言うと暗～い暗～い森に入って行きましたとさ。

罪悪感（後書き）

ちょっと文が短いですがご了承ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3833z/

ひぐらしのなく頃に白　人隠し編

2011年12月14日18時58分発行